



北浜の波打ち際で死亡していたツノメガニの雌
(2004年10月15日)

A close-up photograph of a crab's carapace, showing its textured surface and numerous small, dark, circular holes, likely representing bite marks or damage from predators.

れ、京都大学瀬戸臨海実験所近くの北浜では少なくても12年ほど前から見られるようになつた。

南方系スナガニ類は甲幅3ミリあまりになる中形のカニで、我が国ではまれな種も含めて4種が知られる。もっとも北まで分布しているのがスナガニで、東北地方まで見う

干潟ビダンスする力二たち

毎年夏から秋にかけて、砂浜に直径1センチほどの丸い穴があちこちに開いているのを見かけたことがあるだろうか。これはスナガニ類の巣穴である。

100個を下回り、今年はわずか33個しか見つけられなかつた。

調査で、相模湾や紀伊半島から未成熟個体が記録され、分布していることが分かったという。潮の影響を受けない北浜最上部には、さらに南方系のナンヨウスナガニが03年の調査で発見できたとのことである。

ないのだが、田辺湾奥にある内之浦の干潟に行くと3種が見られる。一番小さいのがチゴガニで、甲羅が1枚ほどしかない。干潮時に、泥の上で多数の個体がそろってダンスをしている。暖かい時期にチゴガニはハサミ脚を勢いよく振り上げては振り下ろし、1分間に30回もこの行動を繰り返す。しかも数が四方の個体全部が、シンクロして

この行動を行つ。見事な
このダンスの意味は、雌
雄が見せる縄張りの誇示
で、他個体への自己存在
のアピールである。11月下旬でも内
之浦の干潟には無数の巣
穴が見られ、干潮時には
朝から活動しているが、
ダンスはあまりしないよ
うである。
チゴガニは瀬戸臨海実
験所水族館で飼育展示さ
れている。ダンスがよく
見えるように水槽
ス面にはマジック
を張り付けて、チ
側からは観客が見
内といえども、最終
する配慮をしてい
た。内之浦にはチゴ
が下がってきたの
まりダンスを披露
なった。
内之浦にはチゴ
よりもずっと大きい
ンシオマネキがい
いハサミ脚を扇状
て潮が込んでくる

いじめられたときに見せたところからこの和名がついた。体よりも大きくて見えるハサミ、脚を打ち振るうのは雄で、雌に対してもみせるディスプレーである。

シオマネキ類に類似するが、色がそれほど派手でなく、体もやや小さいヤマトオサガニやヒメヤマトオサガニも内之浦にいる。又記長崎よりいう。

のガラ
ミラー
ゴガニ
えなく
にハサミ脚の
いる。館
近(気温
つてある。
しなく
っている。
つてある。
たとえ数種
な干渴で暮
も、雌はその
分と同じ種の
仕組みな
る。白
に振つ
のを招
ようだ。

いるシオマネの種が沖縄方の種であるが種ごとの形そのものの形振り方も異なる

和田先生らが、ヤマトオサガニとされていた中に新種としてヒメヤマトオサガニを見出された。ヒメヤマトオサガニの腕振が、万歳三唱の様子そのものなので、この新種を創設・記載される際に、種小名に腕振の特徴をもじつて「banzai(バンザイ)」と名づけられた。これら 2種ともに、当水族館でチゴガニと一緒に飼育展示されている。

脚は、餌取りや巣穴掘りにはあまり使用しない。小さいハサミでもいっぱい砂をすくって口に運び、中に含まれている有機物を食べる。食べた後は砂団子として残す。

A decorative vertical border on the right side of the page, consisting of a series of small, evenly spaced horizontal dashes.

A photograph showing three fiddler crabs on a wet, dark, and textured substrate. The central crab is most prominent, facing towards the left of the frame with its large, dark blue cheliped raised. To its left, another crab is partially submerged in the mud. A third crab is visible near the top right corner. The lighting creates strong shadows on the uneven surface.

内之浦干潟親水公園ではさみを振り上げるチゴガニ（田辺市新庄町で）

京都の海から 白浜で出合つた生きものたち

京都大学助教授
久保田
信（瀬戸臨海実験所）

56